校長雑感

令和8年11月2日
荒川区立第四中学校
学校だより　11月号

「愛犬」

校長　　横林　泰介

ワン!ワン!ワン!　11月1日は犬の日である。

昔、犬は買うものではなく、誰かにもらってくるものであった。私が二十歳の時、中学校時代の友人宅で遊んでいた時「最近犬が生まれたから一匹もらってくれないか」と言われた。５匹いた子犬の中で一番元気が無さそうな犬を家に連れて帰った。案の定、親からは「返してきなさい」と言われた。すると父が「夜遅いから明日にしよう」と言った。この一言が１７年間犬を飼うことにつながった。とても愛くるしい振る舞いをするので、家族全員が子犬を可愛がりたくさん話しかけた。すると子犬は首を傾け「何を言っている」のというキョトンとした顔をした。これが決定的だった。

次の日誰も「返してこい」とは言わなかった。父は「誰が世話をするんだ」「散歩は誰が行くんだ」「食事はどうする」「犬小屋はどうする」「動物病院はどこにあるんだ」などと言いながらいつの間にか「これも縁だ」「名前はどうする」という話になっていた。そして父が名前負けしないようにと「ノロ」と命名し我が家の一員となった。

結局ほとんど母が世話をした。父は定期券入れに、いつ撮ったのか愛犬の写真が入っていた。犬は家族をランク付けしているという。私はほとんど家にいない。たまに日曜日の夕方散歩に行く程度だった。私と散歩に行くとき、ノロは重心を後ろにして前足で抵抗し「お前とは行かない」という意思表示をした。無理やり引っ張り続けて「仕方ないな」という顔で家を出発する。私のランクは最低である。

驚くこともあった。有名人ならぬ有名犬となっていた。父と母そして姉が公園デビューさせていたのだ。私と散歩していると、見知らぬ人から「あらノロちゃんこんにちは」「元気？」と声をかけてもらって頭をなぜなぜしてもらっている。私は「いつもお世話になっています」くらいしか返答できない。すこし嫉妬心もあった。

しかし、最低ランクの私が夜１０時過ぎに帰ってきても毎日欠かさず玄関前でシッポを振って待っていてくれた。私の足音を理解しているようだ。疲れも吹き飛び、犬とじゃれ合った。私は仕事の都合で６年実家を離れ北海道へ行った。盆と正月位しか帰れないが、いつも同じように玄関で待っていてくれた。忠犬ハチ公のように、犬はみんな飼い主に対して忠誠心と愛情をもっている。

飼い始めてから１７年の時が経ち、最も世話をしてくれた母が他界した。その３か月後ノロも母を追うように天国へ旅立った。そして１５年後父も他界した。生前父は「ノロがクンクンと朝の散歩行くよと合図してくれた。自分の母親が子どもの頃朝起こしてくれたのと同じだ。ノロは母の生まれ変わりだ。毎日散歩して健康でいられた。そして長生きできた。感謝している」と話していた。私は、父の棺にノロの写真を入れた。

犬は素晴らしい生き物である。飼い犬に手を噛まれることはない。

【くらべるのは　いつも　過去の自分】

　９月２５日(金)快晴のもと、江戸川区陸上競技場で連合体育大会が実施されました。参加した全ての生徒のやり切った表情は、達成感に満ちあふれていました。また他の中学校の生徒がなかなかゴールにたどり着けない場面では、四中の生徒を応援するのと同じくらいの大きな声を出している姿は涙が出るほどうれしかったです。

　また横断幕の寄せ書き、給食の献立「フレーフレークカツ」など学校全体で応援して頂いた一日でした。

































読書に関する有名人の言葉

私が人生を知ったのは、人と接したからではなく、本と接したからである

アナトール・フランス（詩人・作家）